●モノグラフ

小学生ナウ

Vol. 11-2

日本理解

目次

子ども研究ノート（その2）　国際化と日本理解 …… 2

調査レポート　日本理解

要　約 …… 6

はじめに …… 8

1．日本人に生まれて

- 日本に生まれてよかった …… 9
- 日本志向か外国志向か …… 14
- 外国とのかかわり …… 16
- 外国人としていること …… 18

2．日本をどれくらい知っているか

- 遊び、物語 …… 21
- 行事食 …… 25
- 人物、建造物 …… 26
- ニュース …… 29

3．日本をどう見ているか

- 日本のイメージ …… 31
- 日本人のイメージ …… 35
- 日本の将来像 …… 37
- 世界の中の日本の立場 …… 38

まとめに代えて …… 41

資料1　調査票見本 …… 42

資料2　学年・性別集計表 …… 51

＊おことわり：本文中に使用した写真は、本文・テーマとはいっさい関係ありません。

子ども研究ノート（その2）

国際化と日本理解

——教育の国際化とは——

静岡大学教授
深谷昌志

●乗り物もさまざま

モノグラフの本号は、本来、国際理解をテーマに作られる予定だった。しかし、調査レベルになると、子どもたちの国際理解は狭く、そして乏しい。そうした実態をふまえ、子どもたちの日本理解を分析の焦点に据えることとした。

このところ、「教育の国際化」が教育界の流行になり始めている。さまざまな面で、ともすると国際的な視野を欠きがちな日本だけに、教育面での国際化が必要なことは確かであろう。

そうした国際化の流れに沿って、国際高校が創設されたり、外国人教師を招いて教壇に立ってもらう、そして、姉妹都市との間に子ども相互の交流を図るなどの試みが行われている。

しかし、そうした話を聞くにつけ、「国際化」とは何だろうかと思う。政策レベルになるとやむをえないのかもしれないが、「国際化＝英語に強くなる」という感じ、あるいは外国人と接する機会をふやすのが国際化という発想が目につく。確かに、間違っていないとは思う。しかし、英語に強い人がすべて国際人ではないし、外国人と接すると国際化するとは限らない。それだけに国際化とは何かをシャープにしておかないと、論議が迷い道に入ってしまうような気がする。

子どもを対象とした国際比較を行っているので、このところ、毎年何回か海外へ出かけている。もちろん観光旅行でなく、子どもの生活を聞き取る調査なので、それぞれの土地の人々とふれ合う機会が多い。そうした中から、日本ではあたり前に思っていることが、社会が異なると様変わりするのを体験してきた。

オークランドへ行ったとき、タクシーに乗ろうとした。ドライバーが助手席のドアを開ける。白タクを頼むつもりはないので断って、後ろのシートに座った。しかし、町中で見ると、助手席に人が乗っている。聞いてみると、オークランドでは客が助手席に座るスタイルが一般的らしい。もちろん、これまでこうし

た光景を見かけたことはなかった。なぜなら仮にアメリカで客が助手席に乗ると、ドライバーは現金をとられるのではと恐怖を感じるであろうし、客も、ドライバーをそれほど信頼していないから、隣のドライバーに対して不安感をおぼえる。

そうした意味からすると、オークランドの事例は、ニュージーランドの治安がよく、人が互いに信頼できる、というような風土の上に成り立っているのがわかる。

もっとも助手席に乗るといえば、ソウルでもそうした光景が見られる。ただし、ソウルでは客の相乗りが一般的だ。タクシーが少ないためか、ソウルでは行き先が同じだと客の相乗りを行う。大通りで客のほうが行き先をどなる。それが車の進む方向と同じだと乗せてくれる。その結果、見知らぬ人が3人客になって車に乗ることも生じる。そして、1人でタクシーに乗りたければ、コール、あるいはホテルと書かれた高級のタクシーに乗るか、それとも、ふつうのタクシーでも多少のチップをはずんで相乗りを断ることが必要となる。

タクシーといえば、バンコクのタクシーにはメーターがついていない。そのため、値段はすべて交渉次第で、行き先を告げあとはやりとりをし、値段を決めてタクシーに乗り込む感じになる。

●食事マナーの違い

教育の問題を書いているのに、タクシーの話から始めたのは、ごくあたり前に思われることが社会によって異なる事例を紹介したかったからである。タクシーの乗り方がこのように異なるのであるから、その他のことについても、違いが大きい。

特に、欧米については、かなりの情報を入手しているので、とまどうことが少ない。しかし、身近なアジアのことでは情報を持たずに、無知な部分が多い。例えば、ソウルに限らず韓国の女性たちは正式の形をとると、スカート（パラム）の下の片ひざを立てる。日本式でいうと、あぐらをかいている感じで、初めのうち見よいとはいいにくい。しかし、慣れというべきなのか、何度か見ているうちに、そうした姿勢に違和感を持たず、むしろ美的な感じを抱くようになった。

また、ソウルでは食事のとき、茶碗や汁碗を持って食べるのは厳禁で、片手で机の上の茶碗をおさえ、テーブルから上げないようにして食事をとるのがマナーとなる。さらに、なべ料理などの折、めいめい皿に取ってわけるのも厳禁で、そうしたことは他人行儀のように思われるという。

したがって、ソウルの町で日本の礼法にそって、茶碗をきちんと持ち、漬物をとるときに、はしをさかさにして使ったりしたら、これくらいの無作法はないという失礼な行為となる。

●多民族の中の生活

本誌 vol. 10—9「都市環境の中の子どもたち」で紹介したように、1990年にはアメリカとニュージーランド、タイの学校を訪れた。たまたま、ロサンゼルス郊外の学校へ行ったところ、520名の児童のうち、メキシコ系の114名をはじめ、韓国、中国、プエルトリコなど、28か国を数えた。中には、エジプトやスーダンなど、どうしてそこの国の子どもがアメリカに来られたのかを疑問に思う国の子どももいた。

そうなると、アメリカだから英語で教えるというわけにもいかず、実際にこの学校では、メキシコ語を第一言語とし、英語を第二言語、つまり、English as Second Language. E.S.L. の授業を行っていた。

アメリカにいるはずなのに、教室の中では

ラテンアメリカの雰囲気がただよっている。そして、校長先生の話では、2～3年のうちに韓国語を第一言語にする教室を開く予定で、そのための準備に入っているという。

実をいうと、こうした学校を、これまでに何回も見学してきた。しかも、アメリカだけでなく、ヨーロッパでも、人種が混ざり合い、そして、ひとつの言語――それがその国の言葉であっても――だけでは、教育をできない状況を視察してきた。

ロサンゼルスの前に滞在していたニュージーランドのオークランドでは、英語に加え、マオリ語が課せられていたし、ポリネシアン言語の導入も検討中とのことであった。またタイペイでも、北京語だけでなく、台湾語の教育を求める気運が強まっている。さらに、マレーシアでは、マレー語の授業を行っているが、中国系、インド系、英国系のそれぞれの人から、それぞれの言語を教室で教えてほしいという要望が寄せられている。そして、マニラでは、民族的なタガログ語の授業に対し、英語の授業を望む人たちの要望が強まっているとのことである。

教室の中に、人種的にさまざまな人たちがいる。そして、人種が異なるということは、言葉だけでなく、食事や衣服など、生活そのものが異なるのを意味する。いわば、自分とは異質の存在として、友だちがいることになる。

「国際化」というときに、さまざまなとらえ方がある。しかし、ひとりひとりを異質の存在として認め、そうした異質さをふまえて、共通性を探していく。そうした態度をとることが、国際化の第一歩のように思われてくる。

●日本に生まれたい

冒頭でふれたように、国際化という言葉のわりに、子どもたちは外国との接点に欠けるように思う。しかし、実際はどうか。高校生を対象として、国際化についての意識を調査したことがあるので、その結果の一部を紹介したい（モノグラフ・高校生'90 vol. 29「高校生の国際感覚」）。

まず生徒たちは、どういう国に生まれたいと思っているのか。「どこに生まれてきたいか」の問いに、39.4%が「日本」と答えている。次いでオーストラリア(17.3%)、アメリカ（16.8%）、スイス（9.8%）となる。

オーストラリアは、コアラの国、あるいは大自然に恵まれた国などとして、若い人たちの人気を集めているところで、テレビなどでも、シドニー周辺の風景がうつされることが多い。

高校生が生まれてきたい国として、オーストラリア、そしてアメリカをあげるあたりに、テレビ時代の影響が感じられるが、それと同時に、韓国（0.2%）や中国（0.8%）などのアジアへの評価が低いのも気にかかる。

なお「日本に生まれたい」について属性別に分析してみると、以下のように、女子よりも男子に、日本びいきが多いのが目につく。

	男子		女子	(%)
日　本	43.1	>	30.8	
アメリカ	15.5	<	19.9	
イギリス	6.1	<	12.2	

●外国人としていること

このように、高校生たちは日本をそれほど嫌がっていないように見えるが、それでは、生徒たちは、外国とどの程度接しているのであろうか。

すでにふれたように、国際化といっても、それは言葉だけで、日常生活の中で外国に接するのは、それほど多くはないのが、生徒たちの生活ではなかろうか。テレビを通して外国の情報に接する、あるいは、外国製の物を

買う、そして海外の情報を雑誌で知る、アメリカの歌手のＣＤを買うなど、生徒たちの外国との体験は間接的なものに限られているように思う。

そして調査結果でも、生徒たちが外国人としているのは、「握手をする」(27.0%)か「あいさつをする」(18.9%)くらいに限られている。しかも「した」という者は２～３割にすぎない。したがって、国際化社会といわれていても、実際の生徒たちは、生きた海外に接している割合がそれほど大きくないのがわかる。

このように、生徒たちは、現在のところ外国との接点に乏しいが、それでは将来についてはどうか。「海外でしたいこと」については、「新婚旅行に海外へ行く」ことは、できることなら、ぜひしてみたい(46.3%)。そして「１か月くらい、勉強に海外へ行く」(25.1%)のもしてみたいという。しかし、長期間、留学したり滞在したりする気（15.1%）はないらしい。

もっとも、「したい」というのは「できそう」と思うからそう考えるのであって、「したいと思ってもまったく実現の可能性のない」対象について、「したい」と思う者はおるまい。

●海外との接点

そこで、将来、海外についてさまざまな活動をするのが、実際に可能かどうかを尋ねると、新婚旅行に海外へ行くことは「きっと」の25.3%に「たぶん」の44.0%を含めて69.3%の生徒ができる。そして、１か月くらいの勉強（「きっと」の6.4%に「たぶん」の17.8%で24.2%）や、仲間と仕事で海外へ２週間くらい行く（同2.1%に7.8%で9.9%）のは、なんとかなるかもしれない。しかし、それ以上のことはむずかしいだろうという。

そこで、「したいこと」と「できそう」とを対比して示すと、以下のようになる。

① したいし、できそう
　＝新婚旅行に海外へ行く

② したいし、できるかもしれない
　＝１か月くらい、勉強をしに海外へ行く

③ 無理かもしれないが、できるかもしれない
　＝仕事で２～３週間海外へ行く

④ 無理だろうし、実現の可能性もない
　＝１年くらいの留学や滞在

こう見てくると、どうやら、多くの生徒にとって、新婚旅行に海外へ行くのが、海外と接する唯一の機会のように見える。

それでは、そうした見通しが、生徒たちの属性によって、どう異なるかを分析すると、大学進学希望者のほうが、海外生活を送れそうだと思っている割合は多い。

確かに、進学を考えている生徒たちは、当然のことながら、英語も得意であろうし、それに、大学へ進学すればむずかしい仕事に就く可能性も強いし、それだけに、海外へ出かけることが多いと思いたいのであろう。そして、実際にも海外へ行けると思っている者が多い。

そこで、進路と海外体験との関係をまとめてみると、進学群は海外を自分と結びつけてとらえているのに対し、非進学群は、新婚旅行で行くのはともかく、それ以外では、外国は自分と縁が薄いと思っている。こう考えてくると、高校生でも外国とは新婚旅行へ行くところというのが国際化についての実態であろう。それだけに、小学生の場合、国際化という前に、日本理解を深めることが必要となるのかもしれない。

調査レポート
日本理解
要　約

静岡大学教授　深谷昌志
船橋市立薬円台小学校教諭　新井　誠

1．日本人に生まれて

日本人に生まれてよかったという子が8割。もう一度生まれかわれるとしたら、日本が、50%で第1位。以下、オーストラリア（17%）、アメリカ（9%）となる。（図1、2）

2．外国との接触

外国に行ったことのある子は19%。35%の子は英語を習ったことがある。外国人との接触で一番多いのは、「話をした」で1度だけも含めると68%に達する。（図6、8、9）

3．遊び、物語

こままわしなど、昔からの遊びをよくしている子は1割以下とほとんどいない。日本の物語よりも外国の物語のほうがよく知っている。（図13、14）

●調査概要

1．調査主題　日本理解

2．調査視点　国際化の時代といわれ、外国への関心が急速に高まっている。そんな中で、子どもたちが日本をどれくらい知っているのか、日本に対しどのようなイメージを持っているのかを探ってみる。

3．調査項目　昔からの遊び経験、行事食経験、人物・建造物知識、日本のイメージ、日本人のイメージ、日本志向、父母の態度、外国人接触、など。

4. 人物、建造物

子どもたちがよく知っている人物は、ベートーベンが40%で第1位。以下、エジソン（38%）、徳川家康（30%）となる。

東京ディズニーランドなど新しい建造物はよく知っているが、歴史的な建造物に対する知識は少ない。（図16、17）

5. 日本イメージ

テレビがおもしろいが64%で第1位。以下、平和である（55%）、食べ物がおいしい（55%）と続く。日本と世界を比べて、世界で1位か2位にランクされるのは、平和な感じが38%で第1位。以下、物の豊かさ（34%）、人々のしあわせさ（25%）と続く。全体としては、日本は世界の上位に位置するが、世界でトップクラスとは言い切れないというイメージのようである。（図19、20）

6. 日本人のイメージ

働き者(77%)だけれど、ぜいたく(66%)と感じている。（図21）

7. 日本の将来像

科学技術は、今よりももっともっと進歩すると思っている。(図22)

8. 世界の中の日本の立場

日本が地球の自然を守るためにがんばらなければいけないと強く思う子は72%だが、おとなになったら世界のためになるような仕事をしたいと強く思う子は27%しかいない。（図23、24）

4．調査時期　1990年9月～10月

5．調査対象　東京（新宿、練馬、江東、江戸川、町田）、神奈川（横浜、川崎）、埼玉（浦和、大宮）の小学4・5・6年生

6．調査方法　学校通しによる質問紙調査

7．サンプル数　（人）

学年／性	男　子	女　子	計
4　年	425	391	816
5　年	478	409	887
6　年	476	471	947
計	1,379	1,271	2,650

はじめに

「私共は、アメリカにいても、子どもを立派な日本人としてしつけるように心がけてきました。これからは、アメリカで得た経験をもとにして、日本のよさをもっと見直すよう努力をしていこうと思っています。しかし、無批判的に西欧化されていく今の日本の若者の姿を見ていると、日本の社会の行く末がとても不安になりますね」。これは、アメリカで4年ほど暮らした帰国子女のお母さんの話である。この話を聞きながら、「日本とはどんな国ですか」「日本人らしい日本人とはどんな人ですか」と外国人から尋ねられたら、何と答えるだろうかと考えてみた。改めて、「日本は……？」「日本人は……？」と尋ねられると、自分自身がはっきり「これだ」という答えを持っていないことに気がついた。

今、国際化の時代といわれ、外国への関心が急速に高まっている。そんな中で、子どもたちが日本をどれくらい理解しているのか気にかかる。そこで、子どもたちが、日本のことについてどれくらい知っているのか、日本に対しどのようなイメージを持っているのかを明らかにし、これからの国際理解教育に課せられた課題を少しでも探れればと考える。

1．日本人に生まれて

日本に生まれてよかった

近年、街角で外国から来た人を見かけることが増えた。人だけでなく、外国の言葉やニュース、食べ物、ファッションなど、日本にいながら、異文化との接触の機会が増大している。そんな中で、今の子どもたちは、日本人に生まれたことをどう思っているのだろうか。

図1から明らかなように、日本人に生まれて「とてもよかったと思う」子が58%、「わりとよかったと思う」も含めると82%に達する。子どもたちは、日本人に生まれてきたことに満足していることがわかる。この気持ちは、女子よりも男子のほうが強く、4年から6年と学年が上がるにつれて弱まる。

子どもたちは、どんなことから日本人に生まれてよかったと思っているのだろうか。その理由を自由記述してもらったのが、**資料1**である。日本人に生まれてよかった理由の中で圧倒的に多かったのが、(1)の4年男子が述べているように、「平和で、物も豊かだから」という理由である。その他、(2)の「日本人はやさしい」、(3)の「テレビがおもしろい」などの理由が目についた。また、気がかりなのは、(4)のように「アジアやインドなどと比べるととてもいいと思った」というように、開発途上国と比較し、日本がよいという理由である。日本だけがよければよいという考えや開発途上国蔑視につながらなければと思う。

資料2では、日本人に生まれてよかったと思わないという子の意見を掲げた。多かったのは、(1)のように「ゆとりがない」という理由や(2)のように「他の国のほうが人も心もや

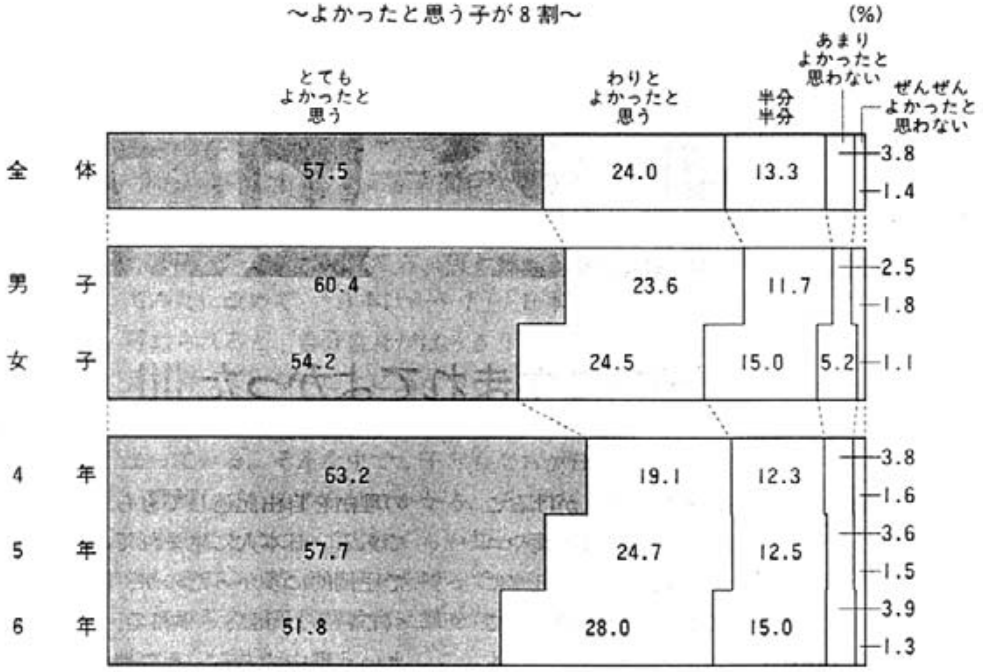
さしい」という理由である。その他、「せまい」「きたない」「自由がない」「遊び場がない」など、鋭く日本の現状を指摘する声が目立った。だが、一方で(5)のような「外人はきれい」と容姿に対するあこがれを理由にあげる女の子らしい理由もあった。

次に、どこの国に生まれたいと思っているのか尋ねてみた。図2を見ると、半数の子が「日本」と答えている。次いで、オーストラリア、アメリカ、スイスとなる。オーストラリアはコアラの国として人気があり、テレビなどでも、オーストラリアの風景がうつされることが多い。子どもたちが生まれたい国として、外国のトップにオーストラリアをあげるあたりに、テレビ時代の影響が感じられる。

なお、「日本に生まれたい」についての属性別のデータを図3に示した。男子や4年生に日本びいきが多い。また、外国に行ったことがあったり、英語を習ったことがあったりと外国との接点がある子は、日本に生まれたいという気持ちが弱まる。

図1　日本人に生まれてよかったか

～よかったと思う子が8割～



資料1　〈日本人に生まれてよかった理由〉

(1)

今は平和だし、物も豊かだから。

(4年男子)

(2)

- 日本の人はやさしい人が多いから。
- 日本は、日本人にとってかもしれないけど生活がしやすいから。
- 道具などが多くあるから。

(6年男子)

(3)

日本は、国がゆたかだし、他の国と、仲も、良いから。
それに、食べ物や、テレビが、おもしろいから、

(5年女子)

(4)

経済的に豊かで、アジアやインドなどと比べると
とてもいいと思ったから。あとなんとなく感じがよくて
住みやすくぶっそーな国じゃないから。

(6年女子)

(5)

日本は山や海や湖のきれいな所がたくさんあるからいい。

(5年男子)

資料２　〈日本人に生まれてよかったと思わない理由〉

（１）

日本人は、ゆとりがない。
フランスなどのようにもっとゆとりがあったほうがいいから。

（５年男子）

（２）

アメリカは、自由があり、また人の心もやさしい。日本は金持ちだけど、せこくて、お金で政治を動かそうとしている。日本より、ずっと他の国のほうが、人も心もやさしいと思うから。

（６年男子）

（３）

日本は、きたない。
せまい。

（６年女子）

（４）

わたしは、自由がある、学校にいきたいです。日本は学校にいろんなものをもっていってはいけないのでやです。あと、しぜんがあんまりなくて、あそびばっかりな！！

（４年女子）

（５）

外人は　だいたいの人はきれいだけど
日本人は、そんなにきれいとはいえないから。

（５年女子）

図２　どこの国に生まれてきたいか

～日本が半数～

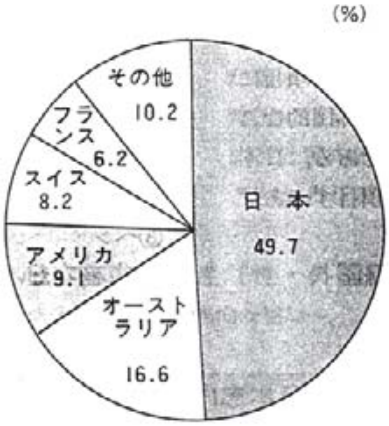
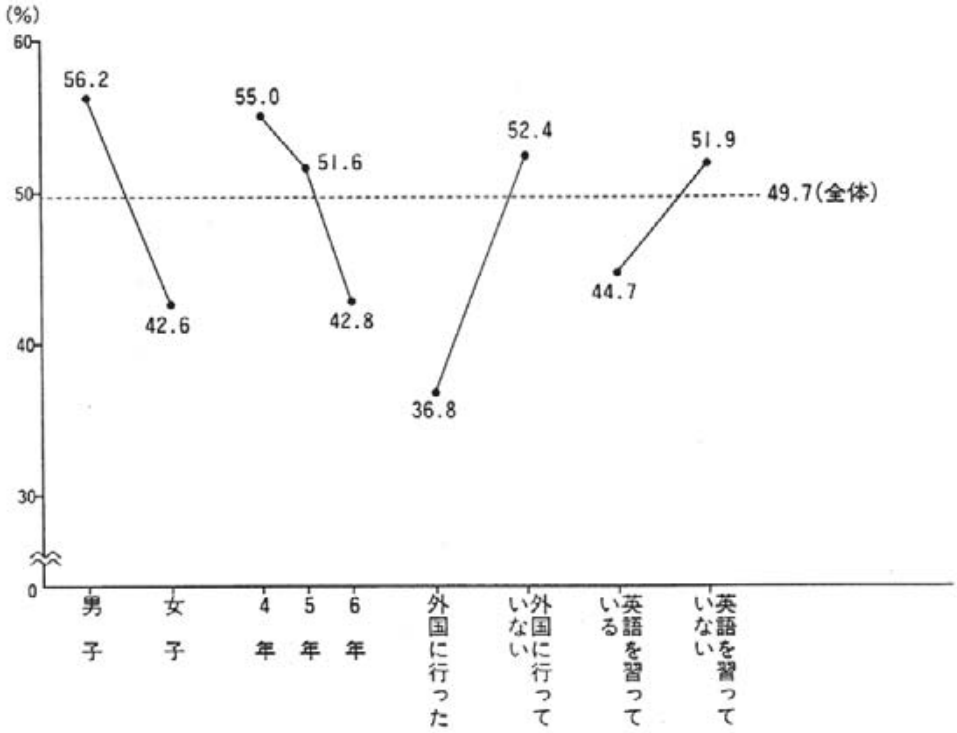


図３　日本に生まれたい×属性(性・学年・外国経験・英語経験)

～男子、４年生、外国経験、英語経験のない子が日本びいき～



■日本志向か外国志向か IIII

子どもたちは、日本が好きなようだが、生活場面において、日本志向が強いのか、外国志向が強いのか尋ねてみた。

図4は、友だちや衣・食・住などの項目について、日本的なことがよいか、外国的なことがよいか選んでもらった結果である。日本志向と外国志向の強い項目を3項目ずつあげると、次のようになる。

〈日本志向〉

①日本の友だち	60%
②ごはん	54%
③はし	48%

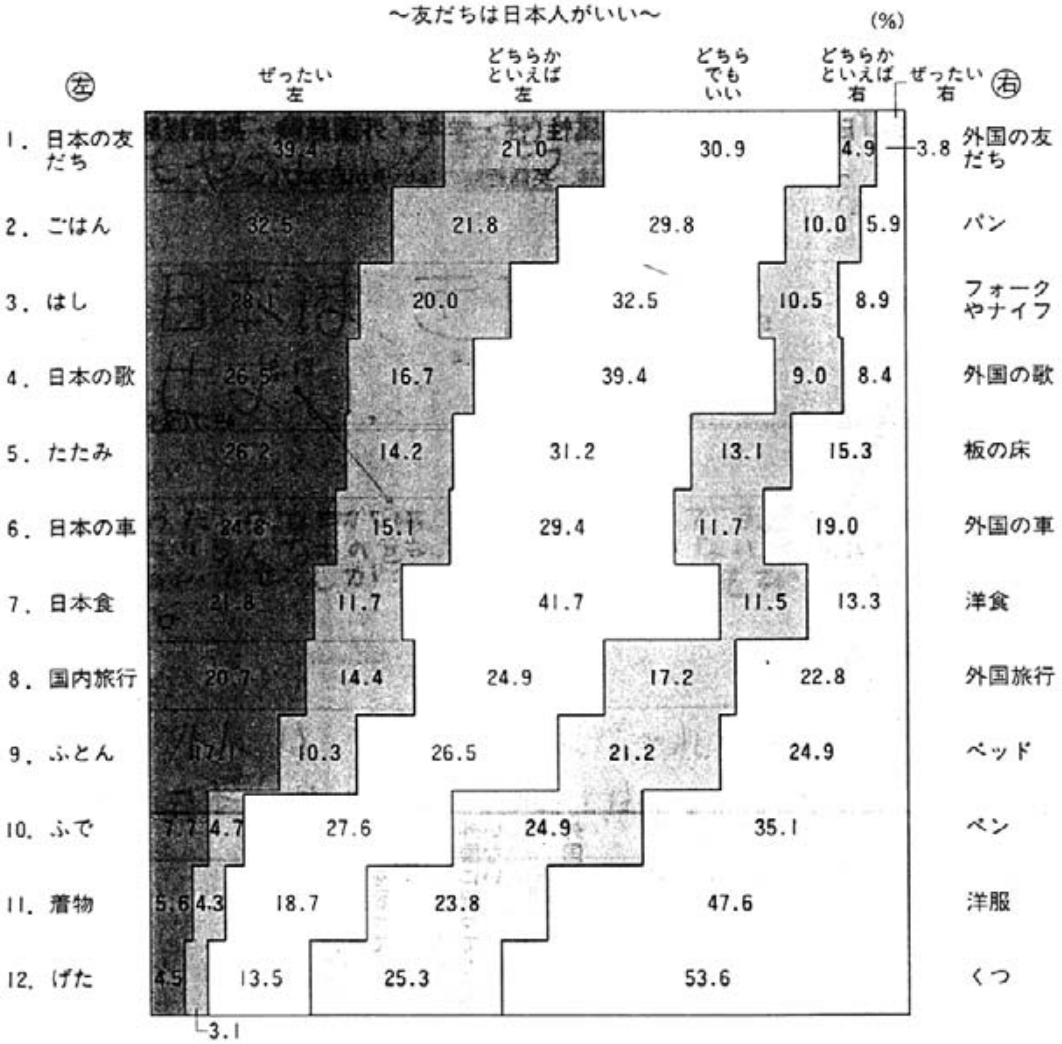
〈外国志向〉

①くつ	79%
②洋服	71%
③ペン	60%

(「ぜったい＋どちらかといえば」の割合)

図4　日本志向か外国志向か

～友だちは日本人がいい～



友だちは日本人で、食事はおはしでごはんがいい。しかし、はき物や服、筆記具は日本の昔ながらのげたや着物、筆よりも、くつ、洋服、ペンがいいということである。「ぜったい日本的なものがいい」という気持ちは、日本の友だちの39%が最高だということでわかるように、それほど強くない。また、「どちらでもいい」という回答もけっこうあることを考えると、日本人に生まれてよかったというわりには、生活面での日本志向が強いとはいえないようである。

さらに属性との関連を見てみよう。**表1**を見ると、日本びいきだった男子は、生活面でも日本志向が強いことがわかる。特に女子との差の大きいのが、日本の友だち、たたみ、日本の歌である。

一方、外国経験の有無と日本志向では、全体的に外国に行ったことのない子の日本志向が強いものの、その差はあまり大きくない。外国に行くと、友だちは日本人、車は日本車、旅行は国内旅行という気持ちが弱まってくることがわかる。

表1　日本志向×属性（性・外国経験）

～男子は日本志向が強い～

(%)

	性			外国経験		
	男子		女子	有		無
1. 日本の友だち	49.1	⋙	28.8	33.0	<	40.7
2. ごはん	38.4	≫	26.1	31.4		32.6
3. はし	32.9	≫	22.9	27.3		28.2
4. 日本の歌	33.3	≫	19.0	23.2		27.0
5. たたみ	33.4	⋙	18.4	24.0		26.3
6. 日本の車	29.3	>	19.9	19.5	<	25.8
7. 日本食	26.1	>	17.2	19.1		22.0
8. 国内旅行	26.3	≫	14.5	11.0	≪	22.7
9. ふとん	21.3	>	12.5	16.0		17.4
10. ふで	8.6		6.7	5.2		8.2
11. 着物	4.5		6.7	5.0		5.6
12. げた	5.4		3.6	4.2		4.7

数値は「ぜったい」の割合
不等号は5%を単位として差を表す

■外国とのかかわり IIII

日本に生まれてよかったという子が多いわりには、生活面での日本的志向が強くないように見えるが、それでは、子どもたちは、外国とどの程度接しているのであろうか。

まず、**図5**は、外国に行きたい気持ちを尋ねたものである。「とても＋わりと思う」という子は7割近くいる。この気持ちは、男子よりも女子のほうが強く、学年が上がるにつれて強まる。

では、実際に外国に行ったことのある子はどれくらいいるのだろうか。外国に行ったという子は19%と、クラスで7～8人は外国に行ったことがあるという(**図6**)。けっこう高い割合だが、これは、調査地域が、東京、神奈川、埼玉の都市部だったことと調査校の中に帰国子女の研究校が含まれていたためだと考えられる。

図7では、家族で外国に行った人がいるかどうか尋ねたが、図からわかるように、7割近くの子の家族は外国に行っている。今さらながらに外国が身近になったと感じる。

外国と聞くと、すぐ言葉のことが気にかかってしまうが、代表的な外国語である英語を習っている子はどれくらいいるのだろう。**図8**を見ると、英語を習っている子が22%、今はやめているが習っていた子も含めると、3人に1人が、小学生段階で英語に接していることがわかる。性差、学年差を見ると、女子、6年生の英語を習っている割合が高い。

図5　外国に行きたいか

～7割近くの子は外国に行きたい～

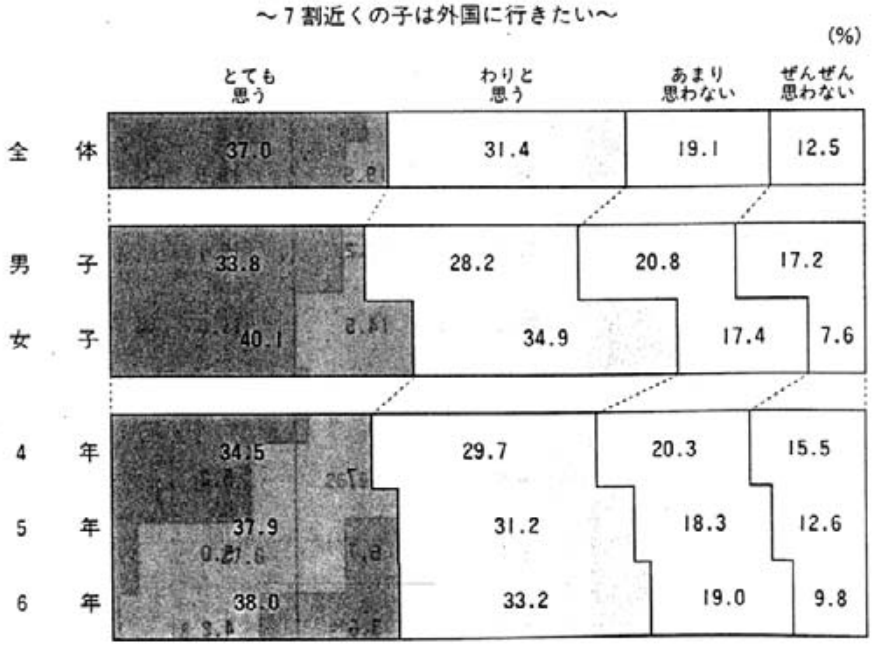


図6　外国に行ったことがあるか

～2割近くの子が行ったことがある～

(%)

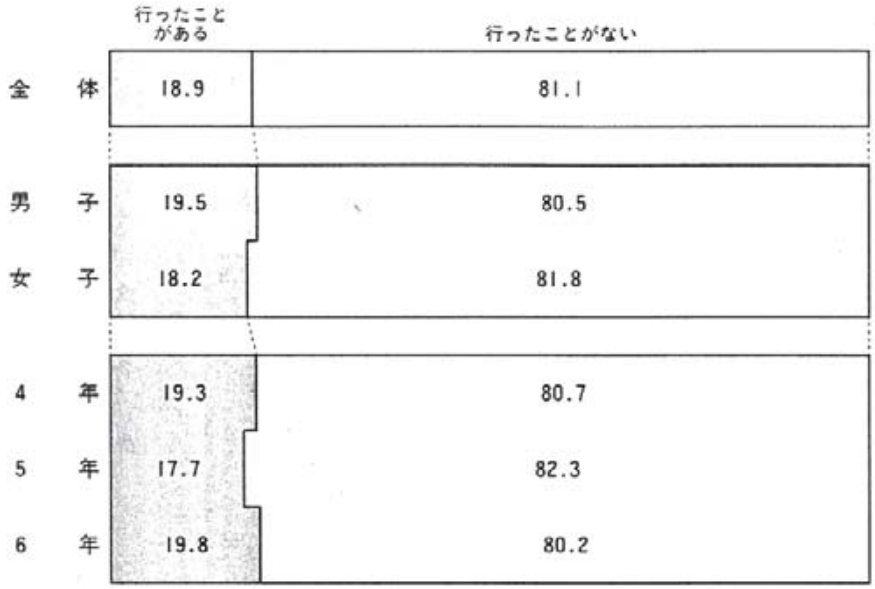


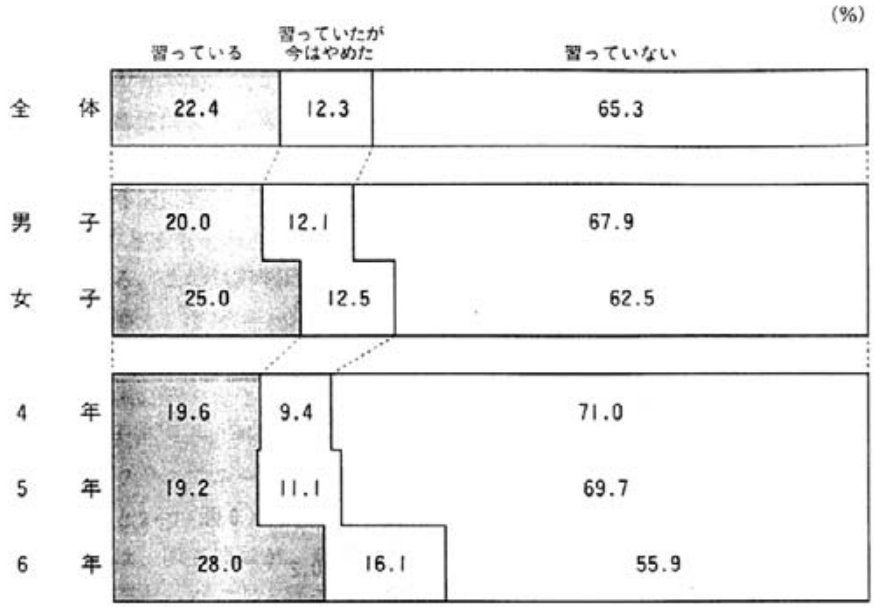
図7　家族で外国に行った人

～7割近くの子の家族は外国に行っている～

(%)

図8　英語を習っているか

～3分の1の子は英語を習ったことがある～



■外国人としていること

外国の情報や物と接する機会は増えているが、日常生活の中で、外国人とどれくらい接しているのだろうか。次の図9では、子どもたちに、外国人としたことについて尋ねた。

子どもたちが外国人としているのは、「話をする」「となりにすわる」「握手をする」といった表面的なふれあい程度である。しかも「何度もあった」という子は2～3割にすぎない。また、このデータは調査地域が首都圏で、帰国子女の研究校も含まれているため、一般よりも高い数値と考えられる。そう考えると、国際化社会といわれていても、実際の子どもたちは、生きた外国と接している割合はそれほど大きくないのがわかる。

外国人と接するとなると、言葉の問題が出てくる。英語を習ったことがある子が3分の1ほどいたが、日本では英語を使う機会が少なく、なかなか身につきにくい。日本人の多くが、外国で、言葉で苦しんでいるのは周知のとおりである。では、子どもたちは、言葉が通じなくても気持ちは通じると思っているのだろうか。図10が示すように、言葉は通じなくても、気持ちは通じると「とてもそう思う」子は42%、「わりとそう思う」も加えると83%にも達する。子どもたちは、言葉に対しては意外に楽観的である。

なお、図11で、属性別の分析をしてみると、外国に行ったことがあったり、外国人接触量（算出の方法は、図9の外国人との接触の5項目について点数化し、加算点を求め、接触量多、接触量中、接触量少の3つのグループに分けて求めた）の多い子ほど、言葉は通じなくても気持ちは通じると思っている。思い切って、外国人と身ぶり、手ぶりで話をして

みたら、けっこう気持ちが通じたという経験がきっとあるのだろう。

言葉に対しそれほど心配していない子どもたちだが、実際に、町で外国人に話しかけられたらどうするのだろう。図12によると、47%と半数近くの子は、身ぶり、手ぶりで何とか話をすると頼もしいが、にげたり、知らんぷりをするという子も2割ほどいる。また、女子のほうが男子に比べ、外国人接触への自信があることが図からわかる。

図9　外国人との接触

～外国人と何度も話した子は3割～

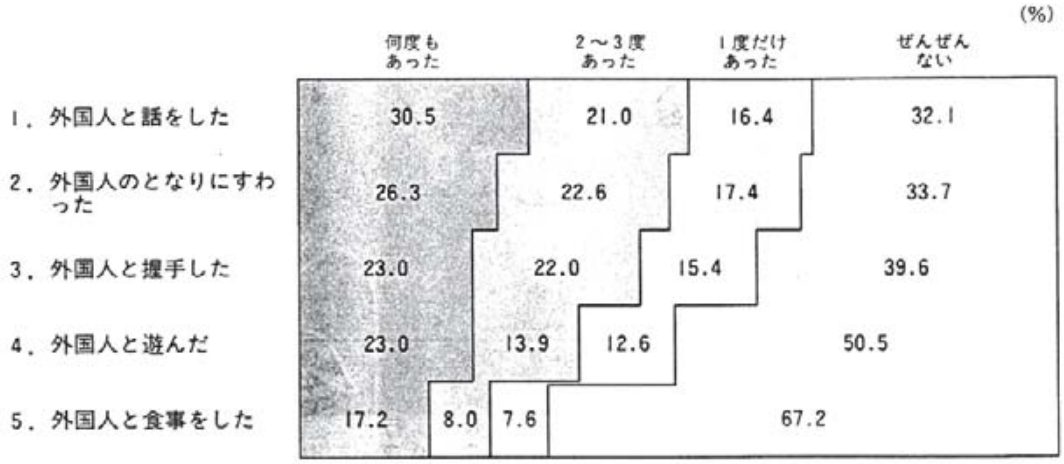


図10　言葉は通じなくても気持ちは通じるか

～通じると思う子は8割～

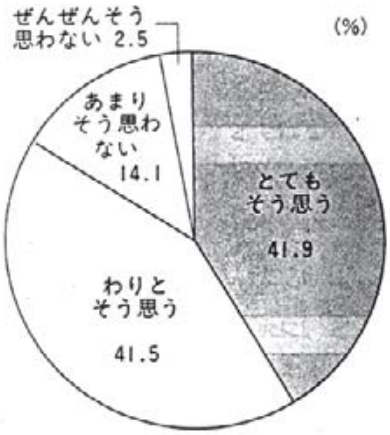
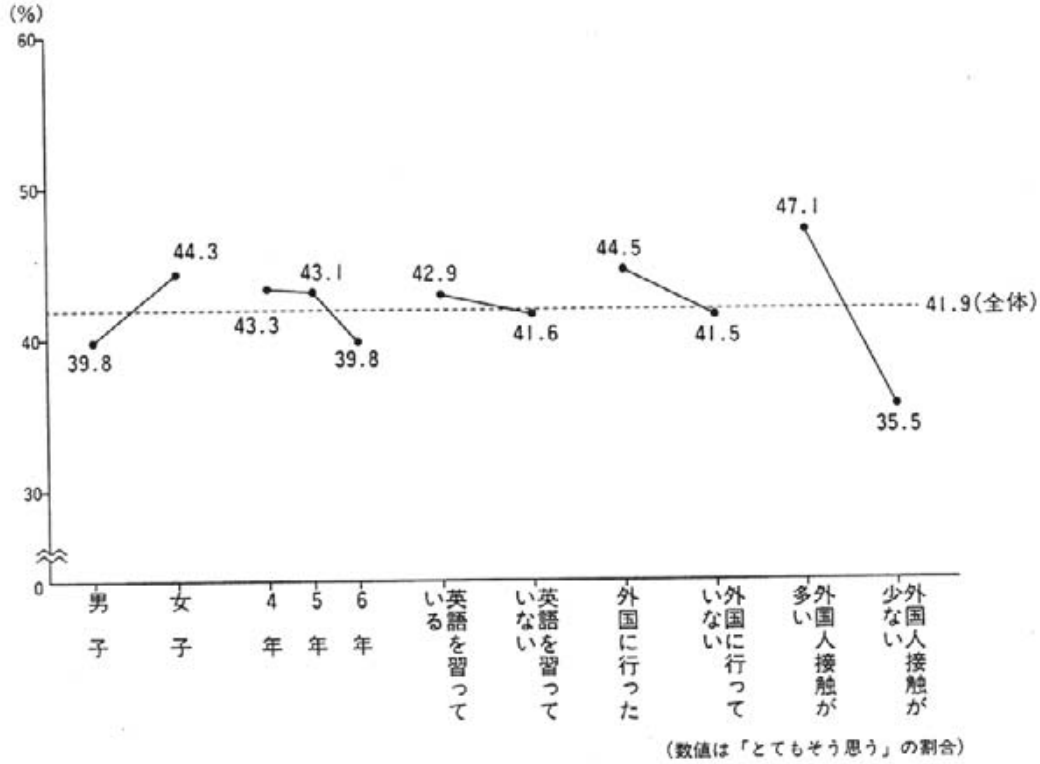


図11　言葉は通じなくても気持ちは通じるか×属性（性・学年・英語経験・外国経験・外国人接触）

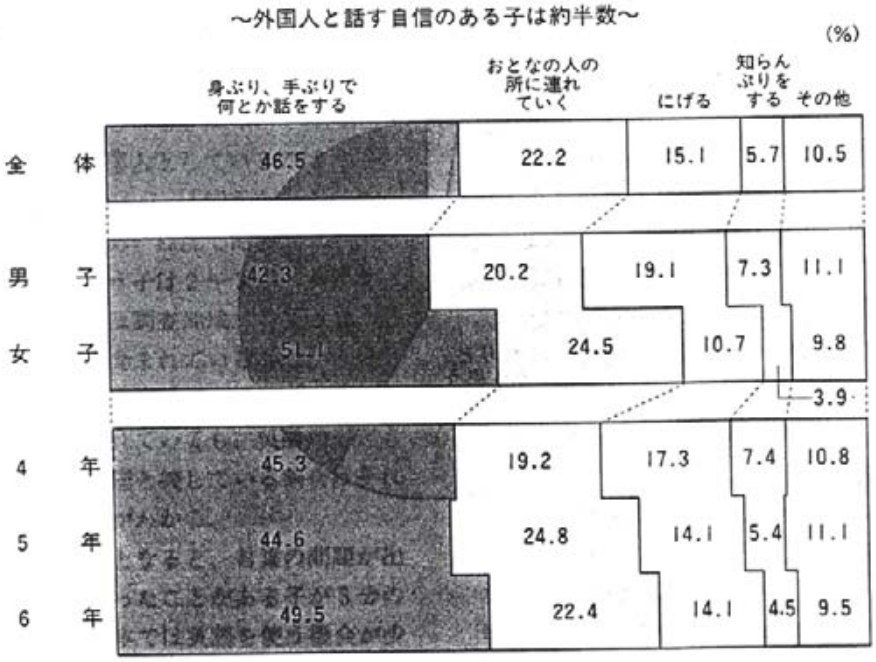
～外国人接触が多い子は、気持ちが通じると思っている～



（数値は「とてもそう思う」の割合）

図12　外国人に話しかけられたら

～外国人と話す自信のある子は約半数～



2．日本をどれくらい知っているか

日本に生まれてよかったという思いが強い子どもたちだが、日本のことについてどれほど知っていたり、経験しているのかをここでは明らかにしたい。

■遊び、物語

まず、子どもたちが昔ながらの遊びをどれくらいしているのかみたのが**図13**である。一番遊んでいる「こままわし」以下の9項目で、「よく遊んでいる」割合は1割にも達しない。「たまに遊んでいる」を含めても、5割に達する項目は1つもない。さすがに、昔ながらの遊びの名前を知らない子はほとんどいないものの、「竹馬」や「笹舟」などは「遊んだことがない」子が3～4割になる。

表2では、属性との関連を見てみた。ここでは、外国とのかかわりと昔からの遊びについて探ったが、表から明らかなように、外国人接触の多い子ほど、昔からの遊びをしていることがわかる。外国に行ったことがある子もそうでない子に比べ、昔ながらの遊びをする割合は高いものの、外国人接触の多い子ほどではない。外国人接触の多い子は、互いに伝統的遊びを紹介しあって遊ぶことが多いのだろう。そして、その中で、昔ながらの日本の遊びのおもしろさに気づき、遊ぶようになるのかもしれない。

次に、どんな物語を聞いたり読んだりして育ったのか尋ねてみた。**図14**を見ると、子どもたちは、「一寸法師」よりも「シンデレラ」や「みにくいアヒルの子」「ピノキオ」のほうがよく知っていることがわかる。子どもたちは、幼い頃から物語を通し、外国の文化に接しているようである。

図13　どんな遊びをしているか

～昔からの遊びを今している子は少ない～

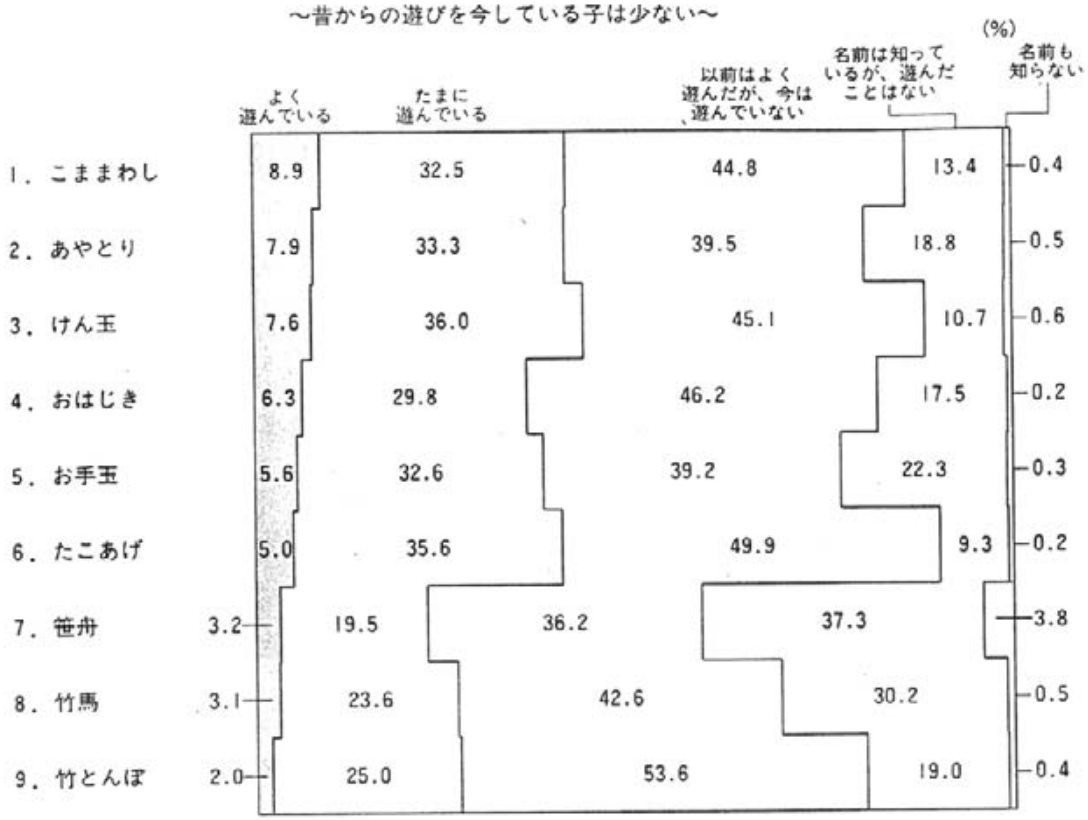


表2　どんな遊びをしているか×属性（英語経験・外国経験・外国人接触・外国への気持ち）

～外国人接触の多い子ほど昔からの遊びをしている～

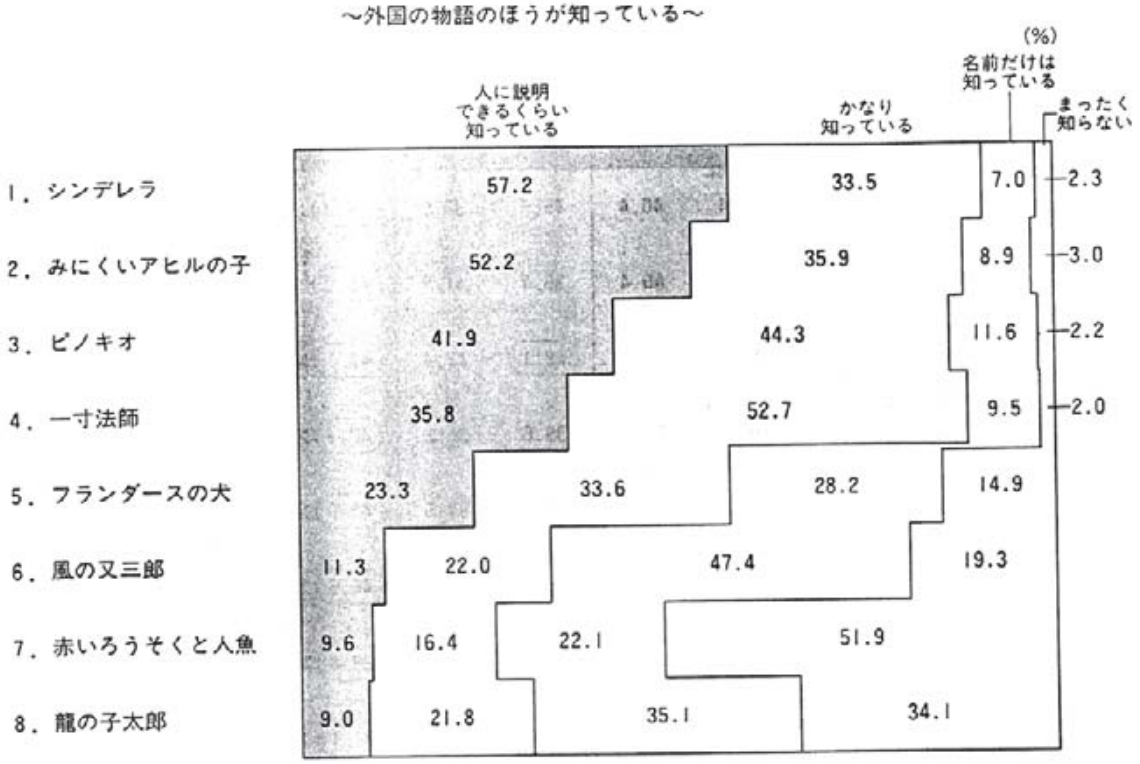
(%)

	英語経験		外国経験		外国人接触		外国に行きたい気持ち	
	有	無	有	無	多	少	強	弱
1．こままわし	41.4	40.4	45.5 >	39.9	(47.9) ≫	34.8	42.7	42.2
2．あやとり	43.6	40.4	39.7	41.9	(45.3) >	37.6	44.4 ≫	33.4
3．けん玉	42.9	43.9	(48.1) >	42.4	(48.1) ≫	36.9	43.1	44.8
4．おはじき	36.3	36.1	39.6	35.2	(42.7) ≫	30.8	39.1 >	30.2
5．お手玉	40.4	37.3	41.5	37.5	(43.9) ≫	33.3	42.2 >	33.8
6．たこあげ	41.3	40.4	43.3	40.1	(46.6) ≫	35.6	42.4	40.8
7．笹舟	24.0	21.9	24.8	22.4	(28.4) ≫	16.7	25.0	23.8
8．竹馬	27.4	26.8	25.7	27.2	(31.1) >	23.7	28.9 >	22.0
9．竹とんぼ	29.2	25.7	31.1 >	26.0	(32.5) ≫	22.5	28.2	25.3

数値は「よく遊んでいる＋たまに遊んでいる」の割合
不等号は5％を単位として差を表す
◯は最大値

図14　どんな物語を知っているか

～外国の物語のほうが知っている～

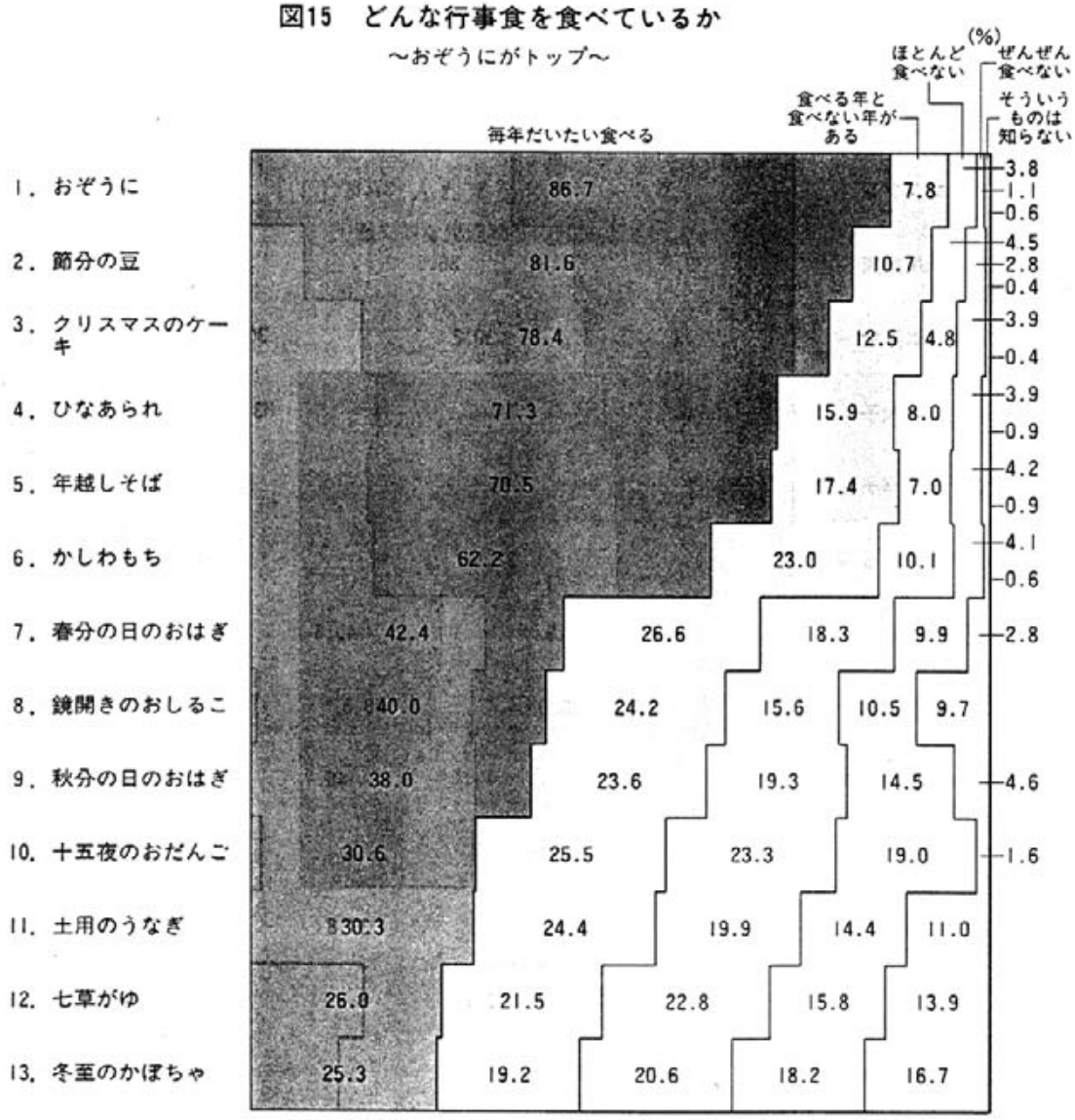


■行事食 ||||

昔の日本の人々は、季節の行事を大切にして、日常生活に節目をつけて生活していた。今のわれわれの生活の中にはそうした行事が次第に姿をひそめつつあるが、そうした行事の時の食べ物を子どもたちがどのくらい味わっているのかをみたのが図15である。「毎年だいたい食べる」という割合が7割を超えるのは、「おぞうに」「節分の豆」「クリスマスのケーキ」「ひなあられ」「年越しそば」である。大きな行事の行事食は多くの子が味わっているようである。一方、クリスマスのように、外国から入ってきた行事もすっかり日本に定着していることがわかる。

図15　どんな行事食を食べているか

～おぞうにがトップ～

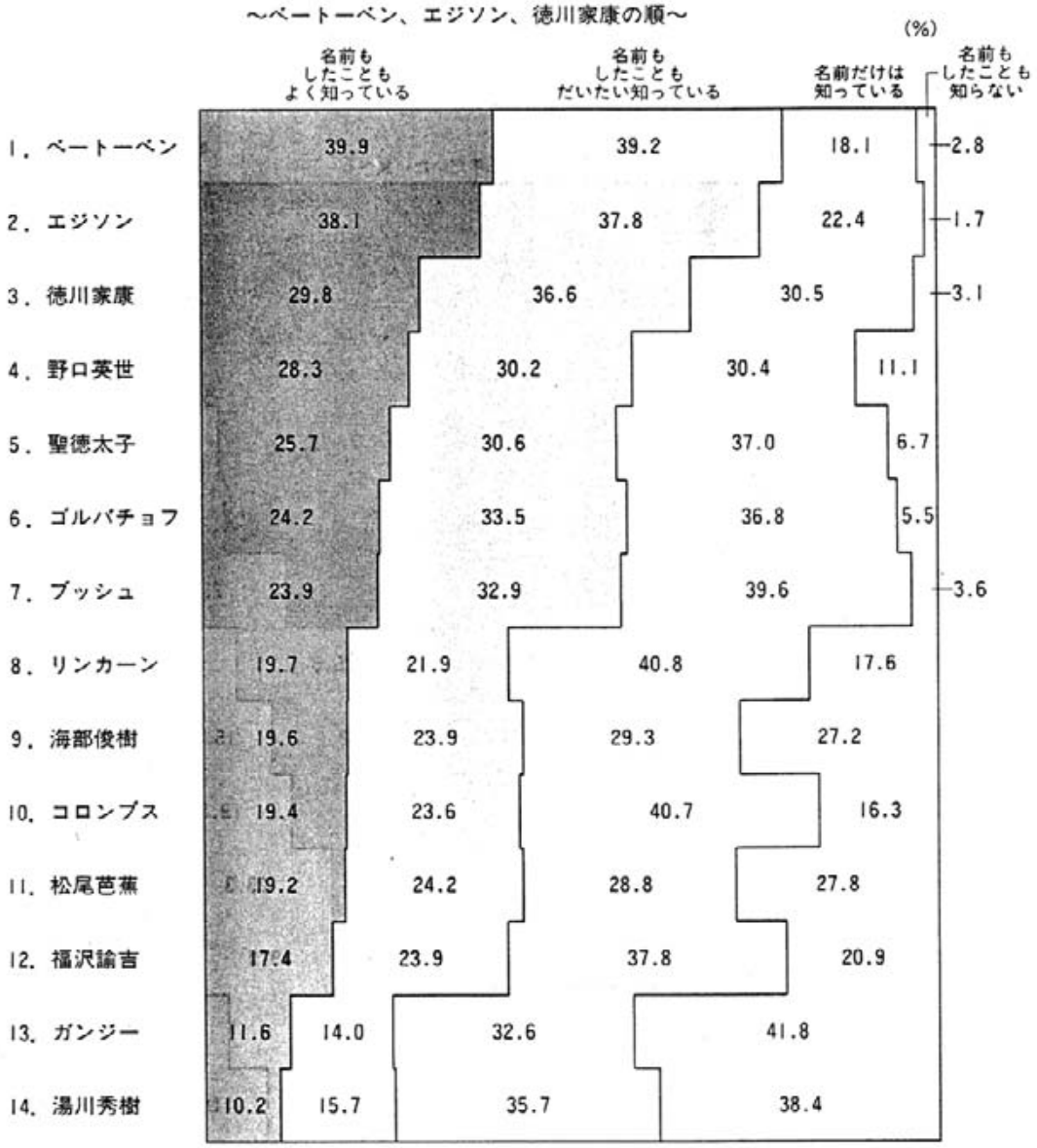


■人物、建造物

幼い頃から、外国の文化や行事とけっこう接触して成長してきているように感じられる子どもたちだが、日本や外国の人物についてはどれくらい知っているのだろうか。ここでは、国内・国外の人物各７人、計14人を掲げ、その人をどの程度知っているか調べた。**図16**では、子どもたちが一番よく知っているのは「ベートーベン」「エジソン」「徳川家康」の

図16　どんな人物を知っているか

～ベートーベン、エジソン、徳川家康の順～



順であり、下位項目に、日本人の名が目につく。「ゴルバチョフ」や「ブッシュ」を知らない子は5％程度だが、日本の首相の「海部俊樹」の名前を知らない子が27％もいる。日本人初のノーベル賞をとった「湯川秀樹」を知らない子も38％いる。日本人なら、日本の歴史上に残る人物についてもっと知ってほしい思いがする。

次に日本の歴史的建造物をどれくらい知っているのか調べてみたのが図17である。さすがに「東京ディズニーランド」や「東京ドーム」は「人に説明できるくらい知っている」子が5割から6割近くいる。しかし、歴史的な建造物になると、「奈良の大仏」でさえ24％で、他は1割台の子しか人に説明できないという。このように、自分の国のことについて知らない子どもたちを見たら、外国の人はどう思うのだろうか。

さらに、属性について調べてみると、表3にあるように、外国に行ったことがある子が日本の歴史的建造物を一番知っている。外国へ行くと日本のことがよくわかるといわれるが、本当に、その通りであることがわかる。

さらに表を見ていくと、外国に行っただけでなく、外国人接触が多い子や英語を習っている子、外国へ行きたい気持ちの強い子など外国とのかかわりがある子ほど、そうでない子に比べ日本のことを知っていることがわかる。このように考えると、外国に興味関心を持たせて、外国の人や文化とのふれ合いを増やし、外国理解を進めることが、日本理解にもつながるといえそうである。

図17　どんな建造物を知っているか

～歴史的な建造物への知識は少ない～

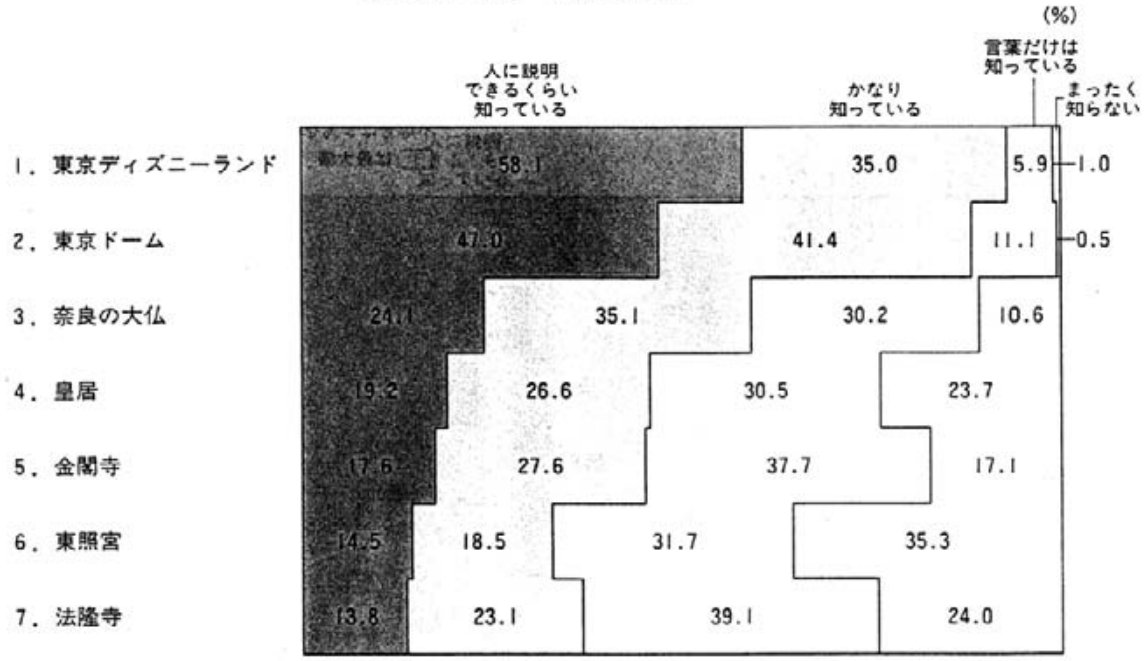


表３　どんな建造物を知っているか×属性（英語経験・外国経験・外国人接触・外国への気持ち）

～外国経験のある子は日本の建造物を知っている～

（%）

	英語経験			外国経験			外国人接触			外国に行きたい気持ち		
	有		無	有		無	多		少	強		弱
1．東京ディズニーランド	64.3	>	55.4	70.8	≫	55.7	68.2	≫	48.1	67.2	≫	46.4
2．東京ドーム	49.7		45.9	55.0	>	45.4	53.3	≫	40.7	52.0	>	45.8
3．奈良の大仏	29.4	>	21.4	34.2	≫	21.7	33.1	≫	16.3	30.5	≫	18.7
4．皇居	23.2	>	17.2	25.7	>	17.8	26.3	≫	13.0	22.9	>	17.6
5．金閣寺	21.2	>	15.8	27.4	≫	15.4	24.3	≫	11.7	21.6	>	12.9
6．東照宮	18.2	>	12.8	20.9	>	13.3	20.4	≫	9.7	18.1	>	9.4
7．法隆寺	17.5	>	11.9	22.8	≫	11.8	20.3	≫	8.0	17.0	>	11.3

数値は「人に説明できるくらい知っている」の割合
不等号は５％を単位として差を表す
◯は最大値

■ニュース||||

21世紀に向かって世界は激しく変動しつつあり、数年前には想像できなかったようなことが、東欧、中東、アジア、朝鮮半島で起こっている。ここでは、そうした国際的な出来事や日本の出来事に対し、子どもたちがどれほど知っているのか調べてみた。

図18が示すように、子どもたちが「人に説明できるくらい知っている」のは、「消費税」がトップで53%、以下、「ベルリンの壁」(35%)、「フロンガス」(28%)、「イラク問題」(22%)と続く。「人に説明できるくらい知らなければ」本当に知っていると言えないというふうに考えれば、日本国内の出来事である「消費税」くらいしか知らないともいえる。調査した前年に「天安門事件」が起き、「ベルリンの壁」がなくなった。調査の直前には「イラクのクウェート侵攻」があったが、子どもたちは、その言葉を知っているだけで、どういうことかは、十分に把握していないことがわかる。自分には関係のないこととしてとらえている子が多いのであろう。

ここでも属性との関連を見てみたい。表4を見ると、外国経験がある子とない子、外国人接触が多い子と少ない子で差がみられる。外国経験があったり、外国人との接触が多い子は、国際的な出来事に対する関心が高いことがここでもいえる。

図18　どんなニュースを知っているか

～消費税、ベルリンの壁くらい～

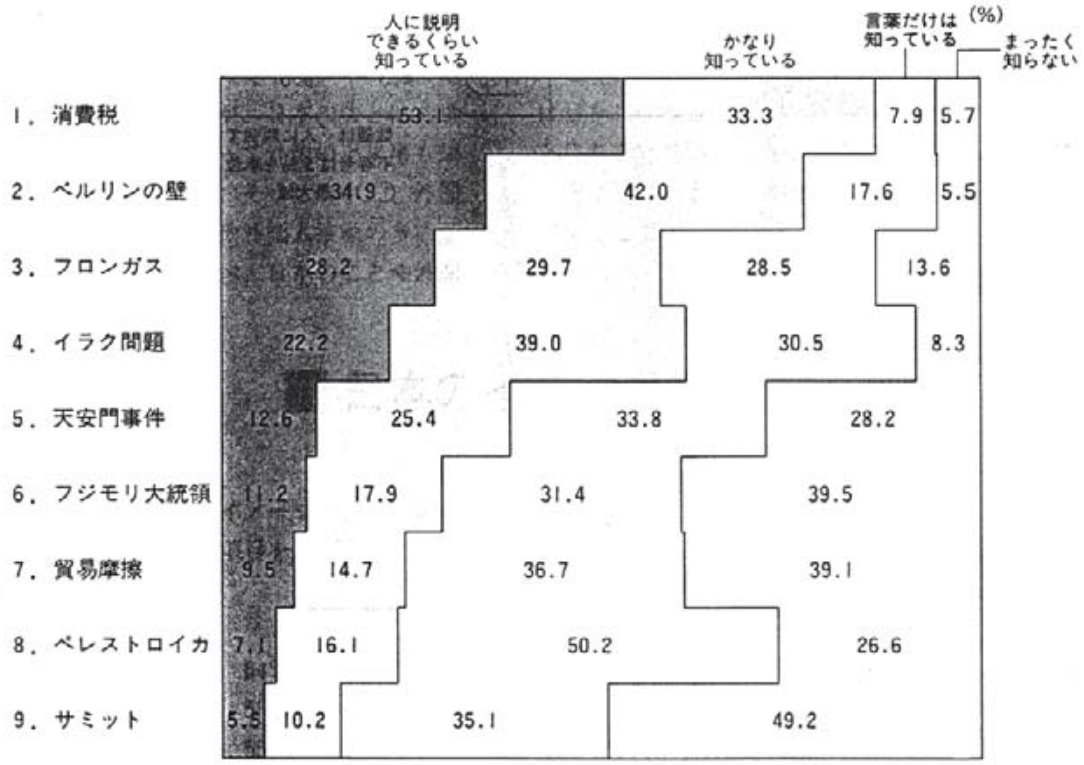


表４　どんなニュースを知っているか×属性（英語経験・外国経験・外国人接触・外国への気持ち）

～外国経験のある子や外国人接触の多い子は国際的出来事に対する関心が高い～

(%)

	英語経験		外国経験		外国人接触		外国に行きたい気持ち	
	有	無	有	無	多	少	強	弱
1．消費税	55.1	52.1	(62.3) ≫	50.9	60.5 ≫≫	44.6	58.2 ≫	46.5
2．ベルリンの壁	40.3 >	31.9	(49.8) ≫≫	31.3	48.7 ≫≫≫	23.0	41.9 ≫	28.3
3．フロンガス	29.9	27.5	(37.1) ≫	26.1	36.6 ≫≫	21.0	34.0 ≫	23.2
4．イラク問題	26.6 >	20.2	(36.9) ≫≫	19.2	34.2 ≫≫	11.8	29.3 >	19.6
5．天安門事件	15.6	11.1	20.8 ≫	10.7	(20.9) ≫	6.3	16.8 >	10.4
6．フジモリ大統領	12.8	10.1	14.9	10.1	(17.9) ≫	5.9	14.0	9.8
7．貿易摩擦	10.5	9.1	(16.3) >	8.0	14.2 >	5.5	12.7	9.7
8．ペレストロイカ	7.8	6.5	(12.5) >	5.7	12.3 >	3.8	9.8	6.1
9．サミット	6.6	5.1	(11.3) >	4.3	9.6 >	3.0	7.4	4.4

数値は「人に説明できるくらい知っている」の割合
不等号は５％を単位として差を表す
◯は最大値

3．日本をどう見ているか

ここまでふれてきたように、子どもたちは、日本に生まれてよかった、また日本に生まれてきたいと思っているが、日本のことはあまり知らないし、かといって外国の出来事も知らないことがわかった。そうした中で、外国に行ったことがある子や外国人接触の多い子が、そうでない子に比べ、日本のことや外国のことを知っているのが印象に残った。

こう見てくると、国際化ということで外国に目を向けるとともに、日本についてももっと目を向けていく必要があるように思う。

そこで子どもたちの抱いている日本イメージをここでは明らかにしていきたい。

■日本のイメージ||||

子どもの抱く日本のイメージは、図19の通りで、上位と下位の3項目をあげると以下のようになる。

〈上位〉

①テレビがおもしろい　64%
②平和である　55%
③食べ物がおいしい　55%

〈下位〉

①自然が美しい　13%
②遊び場が多い　14%
③自由である　28%

（「とてもそう」の割合）

「テレビがおもしろく」「平和で」「食べ物がおいしい」、しかし、「自然はなく」「遊び場も

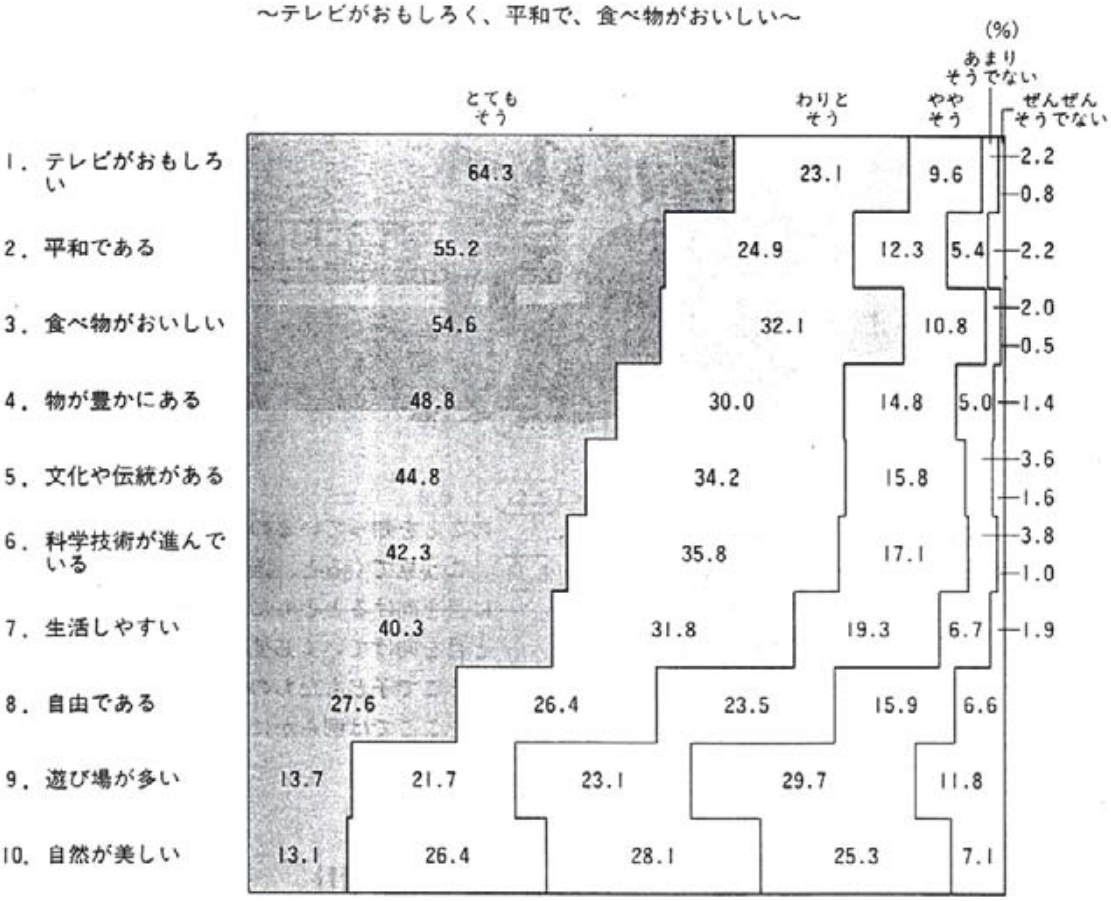
ない」というのが、日本のイメージとなる。都市部の子が持つ日本のイメージとしては、かなり的を射た日本イメージのような印象を受ける。

次に外国経験や外国人接触があると日本のイメージは変わるのだろうか。その点を見たのが**表5**である。これを見ると、外国経験があると、「物が豊か」で、「科学技術が進んでいる」というイメージが強まる。また外国人接触が多いと、「豊かさ」や「科学技術の進歩」に加え、「食べ物がおいしい」「文化や伝統がある」「自由である」と、日本のプラスのイメージが高まる。

このように子どもたちが抱く日本イメージ

図19　日本のイメージ

～テレビがおもしろく、平和で、食べ物がおいしい～



は、世界の国々と比べると、どの程度のものと思っているのだろうか。図20では日本と世界を比べてみた日本のイメージを探ってみたい。

世界でトップクラスにあるというイメージが強いのは、「平和さ」と「物の豊かさ」である。最もイメージの低い、「自然の美しさ」も世界ではまん中くらいという意見が多い。

「世界一か2～3番」から「やや上位」までを合わせると、10項目中、7項目で、7割近くから、それ以上の数値を示す。このことから、子どもたちは、日本は世界でも上位の国であるというイメージを持っていることがうかがえる。

表5　日本のイメージ×属性（外国経験・外国人接触）

～外国との接触があると物の豊かさ、科学技術の進歩を感じる～

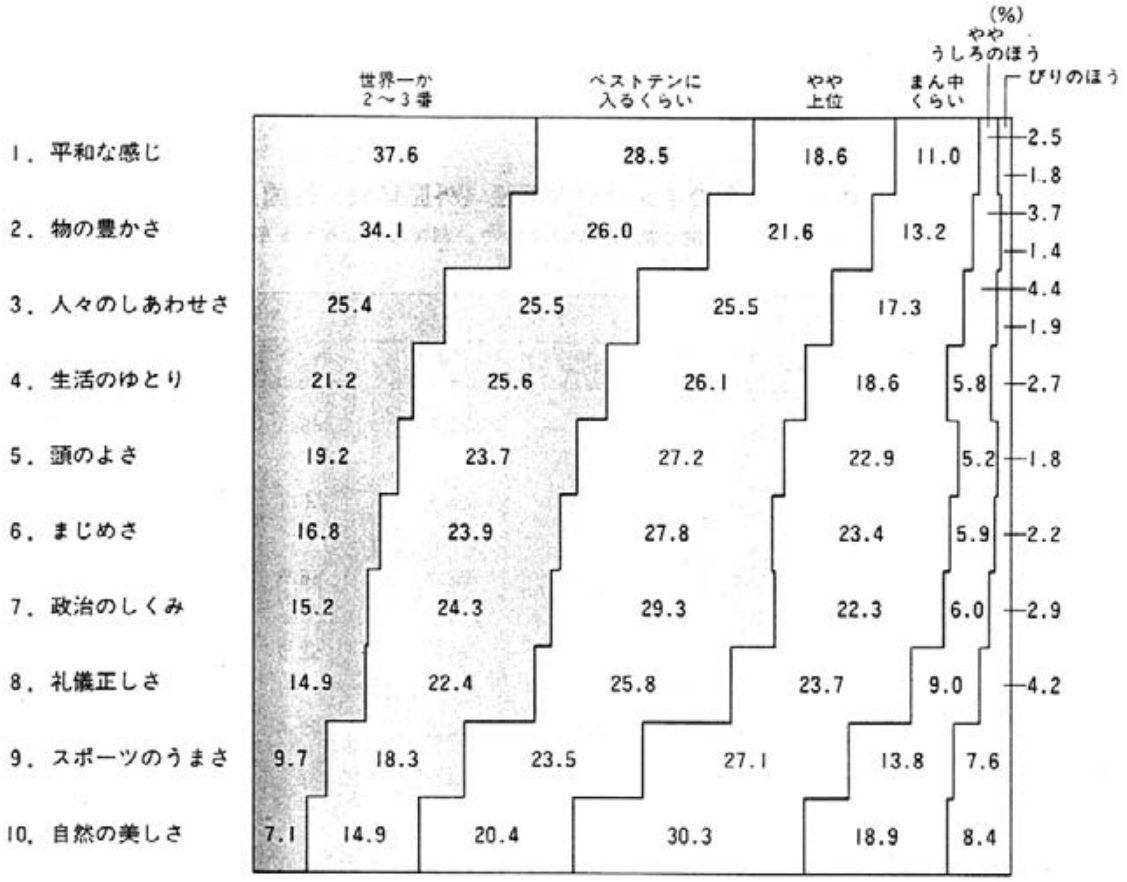
(%)

	外国経験			外国人接触		
	有		無	多		少
1．テレビがおもしろい	65.1		63.7	66.5		62.9
2．平和である	57.9		54.9	58.1		53.2
3．食べ物がおいしい	57.0		53.8	58.9	>	50.8
4．物が豊かにある	53.1	>	47.6	52.7	>	43.1
5．文化や伝統がある	47.3		44.5	49.4	>	41.8
6．科学技術が進んでいる	47.1	>	41.2	47.3	>	37.5
7．生活しやすい	39.3		40.6	42.8		38.0
8．自由である	29.9		27.0	31.2	>	25.7
9．遊び場が多い	14.3		13.5	14.3		12.9
10．自然が美しい	12.1		13.2	15.4		11.3

数値は「とてもそう」の割合
不等号は5%を単位として差を表す

図20　日本と世界を比べると

～平和さは世界のトップと思う子が３人に１人いる～



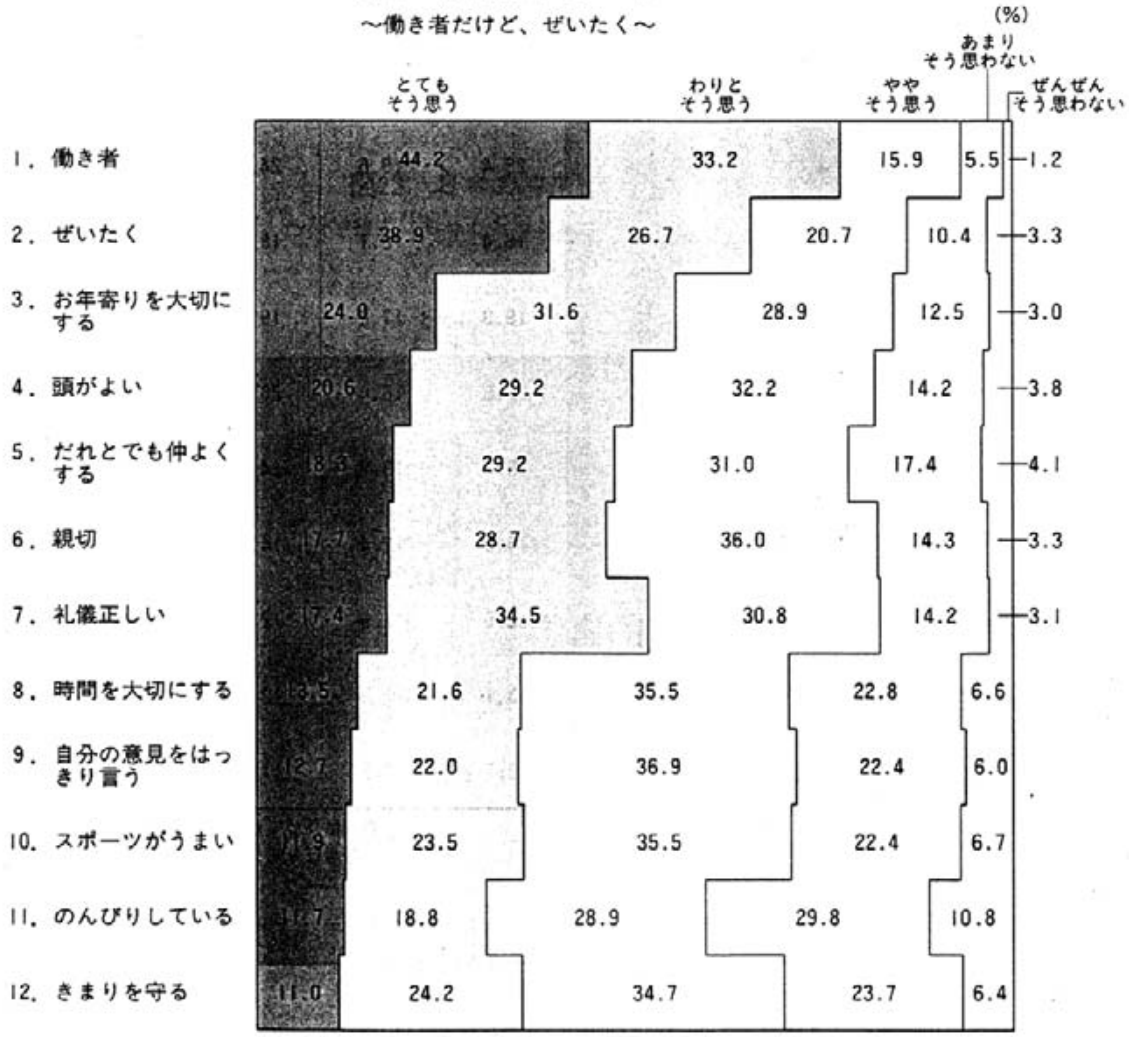
■日本人のイメージ IIII

日本のイメージが明らかになったところで、子どもたちが、日本人についてはどういうイメージを抱いているか調べたのが図21である。子どもたちは、日本人といわれると、まず、「働き者」をイメージするらしく、「とても＋わりとそう思う」子が77%いる。しかし、「ぜいたく」という子が66%で2番目に高い数値を示す。他の項目は「とてもそう思う」の数値が1割から2割で、これが日本人だという強いイメージには結びつかないようである。

働き者だけれどもぜいたくという日本人イメージを持っていることが明らかになったが、外国を経験してきている子たちはどのようなイメージを持つのだろうか。属性について調

図21　日本人のイメージ

～働き者だけど、ぜいたく～



べたのが表6である。

外国経験のある子や外国人接触の多い子はそうでない子に比べ、日本人は「働き者」で「頭がよい」という割合が高い。さらに、外国人接触の多い子は「ぜいたく」「お年寄りを大切にする」「礼儀正しい」というイメージを持っている。外国人との接触が多くなると日本人イメージをより明確に持つようになることがわかる。

表6　日本人のイメージ×属性（外国経験・外国人接触）

～外国とのかかわりがあると働き者で頭のよさを感じる～

(%)

	外国経験				外国人接触			
	有		無		多		少	
1．働き者	50.4	>	42.4		47.8	≫	37.6	
2．ぜいたく	40.5		38.2		44.1	>	34.5	
3．お年寄りを大切にする	24.5		23.6		27.2	>	18.7	
4．頭がよい	25.4	>	19.6		24.3	>	15.8	
5．だれとでも仲よくする	16.4		18.7		18.4		17.5	
6．親切	19.3		17.2		19.0		14.7	
7．礼儀正しい	20.8		16.4		20.8	>	12.6	
8．時間を大切にする	15.4		13.2		14.1		11.4	
9．自分の意見をはっきり言う	14.8		12.4		14.8		10.5	
10．スポーツがうまい	12.5		11.6		12.5		10.7	
11．のんびりしている	13.1		11.0		12.1		10.7	
12．きまりを守る	12.7		10.3		11.2		8.4	

数値は「とてもそう思う」の割合
不等号は5%を単位として差を表す

■日本の将来像IIII

日本や日本人のイメージが明らかになったが、子どもたちは、日本は今後どんな点がよくなったり悪くなったりすると考えているのだろうか。その答えが図22である。よくなるという項目と悪くなるという項目を2項目ずつあげると次のようになる。

〈よくなる〉

①科学技術の進歩　88%

②物の豊かさ　63%

（「とても＋ややよくなる」の割合）

〈悪くなる〉

①自然の美しさ　54%

②人々の親切さ　27%

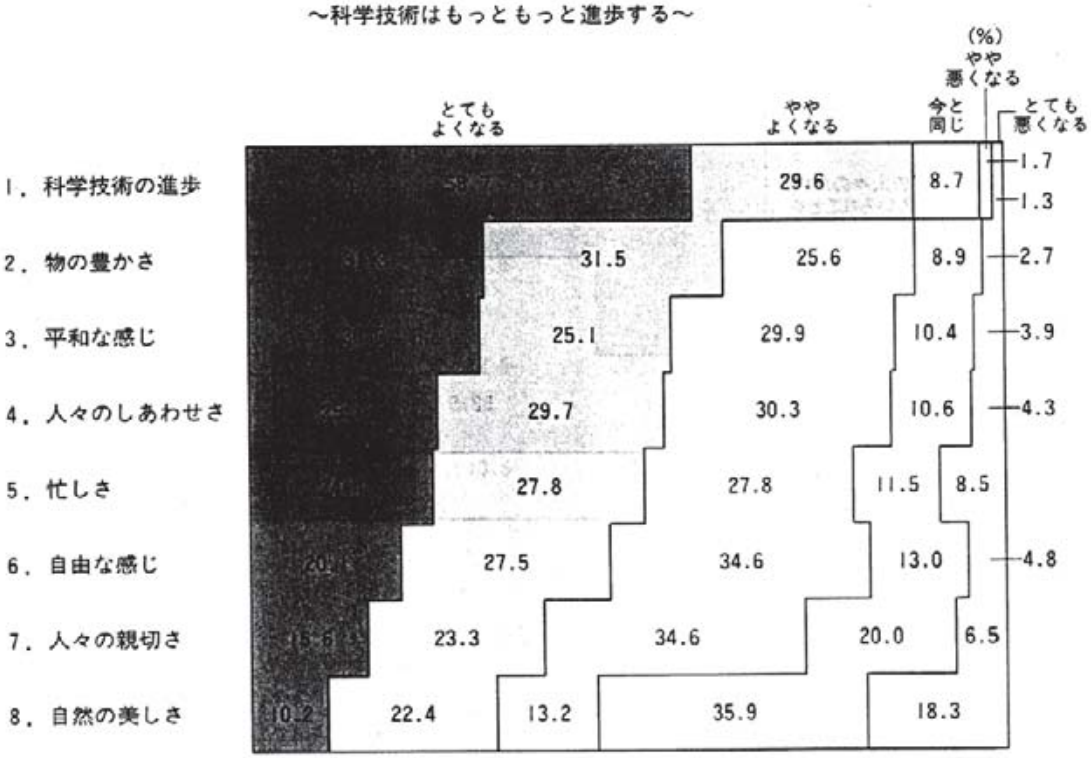
（「とても＋やや悪くなる」の割合）

科学技術が進歩し、豊かな生活になるけれども、自然は破壊され、人々の気持ちも荒れてくるだろうというのが、子どもたちの描く日本の将来像である。

科学技術の推進に力を注ぐが、環境保護が忘れられがちな日本を見ていると、子どもたちの予想するような日本になるような気がしてしまう。物の豊かさだけが優先するのではなく、自然と共存し、豊かな心を持って暮らしていける日本が求められてならない。

図22　日本の将来像

～科学技術はもっともっと進歩する～



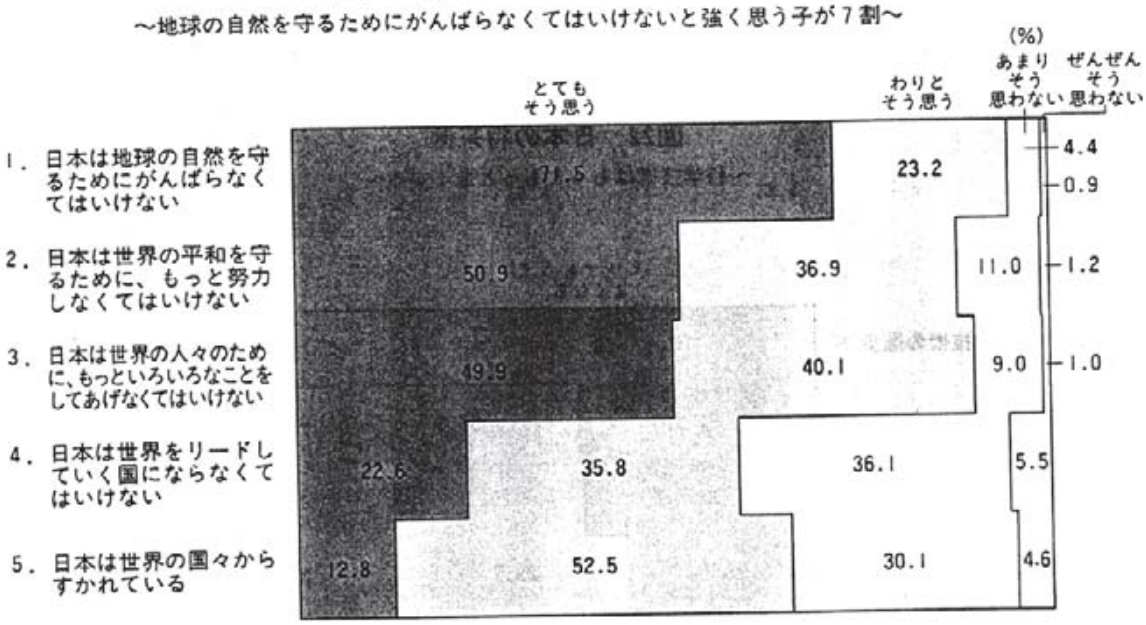
■世界の中の日本の立場 IIII

これまで、いろいろな角度から日本に対する子どもの理解を探ってきたが、最後に、世界の中の日本を考えたとき、日本はどんな立場にあると思っているのかを探ってみたい。

図23を見ると、「日本は地球の自然を守るためにがんばらなくてはいけない」「日本は世界の平和を守るために、もっと努力しなくてはいけない」「日本は世界の人々のために、もっといろいろなことをしてあげなくてはいけない」と「とても＋わりとそう思う」子が9割前後いる。急速な国際社会の中で、日本は世界のために貢献する必要があるという思いが大きいことがわかる。「世界の中の日本の役割」の重要性を大部分の子は理解しているようであるが、日本は「世界をリードしていく国」になるほどのことはないと思っている。

図23　世界の中の日本の立場

～地球の自然を守るためにがんばらなくてはいけないと強く思う子が7割～



なお、属性についてみると、**表7**にあるように、外国人接触の多い子ほど、世界のためにがんばっていろいろなことをしなければならないという気持ちが強い。

大部分の子が「世界の中の日本の役割」を理解していたが、彼らはおとなになったとき、日本のためや世界のためになる仕事をどれくらいしようと思っているのだろうか。**図24**からわかるように、おとなになったら、日本や世界のためになるような仕事をしたいと思っている子は6割程度いる。しかし、「とてもそう思う」の割合は3割にも達せず、世界のために日本は貢献しなくてはならないが、自分がそのための仕事をしようという意欲は弱いことがわかる。世界の中の日本人という自覚が弱く、他力本願的な態度がうかがえる。

表8を見ると、外国とのかかわりのある子は、そうでない子と比べ、世界のためになるような仕事をして貢献しようという意欲の強いことがわかる。その意欲は、外国に行ったかどうかということ以上に、外国人との接触量に影響される。外国人接触の多い子は、世界だけでなく、日本のための仕事もしたいという気持ちも強く持っている。

表7　世界の中の日本の立場×属性（外国経験・外国人接触）

～外国人接触の多い子は世界のために活動しなくてはいけないという気持ちが強い～

(%)

	外国経験			外国人接触		
	有		無	多		少
1．日本は地球の自然を守るためにがんばらなくてはいけない	77.2	>	70.2	75.2	>	67.6
2．日本は世界の平和を守るために、もっと努力しなくてはいけない	49.8		51.3	54.5	>	47.6
3．日本は世界の人々のために、もっといろいろなことをしてあげなくてはいけない	51.6		49.6	55.3	>	45.6
4．日本は世界をリードしていく国にならなくてはいけない	22.6		22.7	27.3	>	21.2
5．日本は世界の国々からすかれている	13.5		13.0	13.3		11.7

数値は「とてもそう思う」の割合
不等号は5%を単位として差を表す

図24　日本と世界への貢献の意欲

～貢献意欲の高い子は４分の１～

(%)

	とても そう思う	わりと そう思う	あまり そう思わない	ぜんぜん そう 思わない
1．おとなになったら、日本のためになるような仕事をしたい	27.5	38.9	27.6	6.0
2．おとなになったら、世界のためになるような仕事をしたい	26.8	35.2	30.1	7.9

表８　日本と世界への貢献の意欲×属性（外国経験・外国人接触）

～外国人接触の多い子は貢献意欲が強い～

(%)

	外国経験			外国人接触		
	有		無	多		少
1．おとなになったら、日本のためになるような仕事をしたい	29.2		27.2	31.0	＞	25.3
2．おとなになったら、世界のためになるような仕事をしたい	32.1	＞	25.5	34.9	≫	21.4

数値は「とてもそう思う」の割合
不等号は５％を単位として差を表す

まとめに代えて

これまでのデータを通して気にかかることは、子どもたちが日本人に生まれ、今の日本の平和と豊かさを満喫しているけれども、日本のことをよく知らないということである。それでは、国際化時代の中で、外国についての興味・関心が高く、外国人と接し、世界で活躍しようと思っているのかというと、そうした印象も受けない。

本レポートで紹介した子どもたちの姿を見ていると、このままでは、激しく変動する国際社会の中で、日本人及び日本が根なし草になってしまうような危惧を感じる。

今回の調査では、外国に行ったことのある子や外国人との接触の多い子のほうが、日本や外国のことをよく理解していた。外国とかかわり、国際的な視野を持つことにより、日本についての理解も深まったようだ。

国際化社会の進展の中で、子どもたちが、国際理解を深め、よき国際人として育つためには、外国の文化、伝統、習慣を理解するだけでなく、日本と日本文化のよさを一層発展させ、日本人としてのアイデンティティを失わないようにする努力を忘れないようにすることが大事だと思う。そのためには、知識として、日本や外国を理解するのでなく、日本や外国を問わず、人、物、情報とふれ合う機会をたくさん持つことが求められる。さまざまな体験を通し、日本や外国の生きた社会を学ぶことにより、日本理解とともに国際理解も深まっていくのである。